

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

秋田ファイブワン工業株式会社
取締役会長 佐賀 善美 氏

1949年、秋田市生まれ。
日本大学法学部卒業後、都内出版社などでの勤務を経て、
秋田県の誘致企業として、1974年創業した秋田ファイブワン工業株式会社に入社。
その後、代表取締役社長を経て、2019年より取締役会長として現在に至る。

働きやすい環境で人間性を重視した自己啓発型の工場追求を目指す

工藤 先日はありがとうございました。本日もよろしく願いいたします。まずは佐賀会長の経歴についてお聞かせ願えますか？

佐賀 私は1949年に秋田市豊岩で生まれ、地元の小中高へ進みました。その後1971年日大法学部を卒業後、都内出版社などに勤務しました。狭き門の中、日経ジャーナルの記者として採用されました。相手を見る姿勢、聞く姿勢が良いとのこと採用になったと後日耳にしました。仕事内容は中小企業に取材記事を掲載していただく営業をしていました。色々なお客様がいて、取材中に自身の苦労話に感極まって泣き出す方もいらっしゃったのが今でも忘れられません。記者時代は書いて仕上げる作業にとても苦労したのですが、それが非常に楽しくもありました。2年弱の勤務でしたが、今振り返ってみるとその経験が後々の仕事にも生きることになったと思います。これは有料でしたか？ 笑

工藤 この取材は無料です。苦笑。元々大阪にあるファイブワン工業（現ファイブワン・ファクトリー）秋田工場としてスタートしたとのことですが、入社されてからご苦労などはございましたか？

佐賀 私は1974年の創業から数か月後に経営幹部候補の求人に家族が勝手に応募したことが縁で入社しました。笑。入社してからの数年、秋田工場はかなりの赤字もありました。品質面でも大阪本社に比べて劣っていた部分もあったように思います。また当時はトラックで商品を輸送する際の湿

度管理の技術も不足しており、秋田から大阪までの輸送に伴う品質劣化によるメーカーからの返品にも悩まされました。私なりに色々考えてこのままではダメだと決意し、当時の社長に東京都内での営業活動を志願しました。最終の夜行列車で上京し日中は営業活動をしてその日の最終で帰秋。といったタイトなスケジュールもめずらしくなかったのですが、不思議と苦労は感じませんでした。最初は中々うまくいきませんでした。ある日メンズビギ製品の試作作成のチャンスをいただきました。結果この生産を請け負うことになり、その後は何かの波に乗ったように、ニコル、ギャルソン、ワイズ、などの名だたるブランドを次々と受注することができました。当時はDCブランドの最盛期でもあり、時の流れや運もあったと思いますが、志願して営業を担い結果が出たことは本当に嬉しかったです。こうして60年代前半で何とか赤字を清算することができ、後に社長として本格的に経営に携わることになりました。

工藤 あらためて自ら動くことって大事ですね！そして有名一流ブランドばかりですね！すごいです。社長に就任してから重点的に取り組まれた事柄はございますか？

佐賀 まずは5S運動（整理・整頓・清潔・清掃・躰）の定着に取り組みました。外部コンサルと一緒に整理整頓や無駄を省くこと、コミュニケーション力の向上にも注力しました。特に、働きやすさ、生産性の向上などを求めて2000年10月に現在の新社屋を建

設しました。当時はうちのような雰囲気の空間ある縫製工場は日本では皆無でした。

工藤 確かに。前回工場見学をさせていただいた時の印象としては、とにかく開放感があって良い意味で工場らしくない素敵な空間だなあと感じました。

佐賀 仕事をするには働く環境が大切と思い、床暖房、吹き抜け、空調などの設備投資にも力を入れました。わが社の理念のひとつは「ヒューマンファクトリー」です。働きやすい環境で人間性を重視した自己啓発型の工場を追求する。従業員が「自分たちの会社」という意識を持てるようにしたい。もうひとつは「一人のお客様を大切に」です。高い技術とクオリティを守り、真心を込めたモノづくりに徹する。例えばわが社では全点検査を2回行っています。裏返して、本当に細かいところまで検査しているのですが、検査とは本来は無駄なものです。一人のお客様への万が一をなくしたい。という思いでやっています。お取引先から評価していただいている点の一つだと思っています。わが社は様々なブランドの様々な素材、あるいはデザインの取り扱いがありますが、それに加えて最近ではロットが少なく何パターンもあるということが増えました。頭を使うので大変ですが、そういったもののほど完成した時の喜びが感じられるものです。

工藤 おそらく口で言うほど簡単なことではないと思いますが、何か工夫されていますか？

あきたBizフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

佐賀 そうですね。自己啓発型の工場を目指すにあたり、意見交換の場として「小集団ノート」というものを採用し継続して活用しています。提案であったり、苦情であったり、とにかく忌憚のない意見を従業員に記入してもらい、その後必ず責任者が明確な返答をしなければならないルールで、「検討します」のようなあいまいな回答はNGです。意見はどんなものであれ会社にとって大切なものです。と同時に、それに記入することで従業員のフラストレーション解消にもなるのではないのでしょうか。皆から率直な意見を出してもらいやすいように、あえて小集団という設定をしています。

工藤 検討しますNG! 苦笑。上司にはキツイかもしれませんが、素敵なルールですね!

佐賀 あと数年前にイエローハットの社長さんが自らトイレ掃除を行っているという話を知り、私もやってみました。その後他の従業員にも一緒にやってみないかと提案し、試行錯誤しながら社内の清掃活動は従業員と一緒に取り組んでいます。ものづくりの会社なので、真心を込めてものをつくるということにそれらの行動が繋がると考えています。

工藤 率先垂範。素晴らしいですね。今年三冠王になったヤクルトの村上選手も高校時代キャプテンとして自らトイレ掃除をしていたという逸話もありますね。

佐賀 いいですね。他には、課長職以上の役職者は一人5枚の「ありがとうカード」を従業員に渡しています。3か月に一度、貰った枚数が多い方を表彰しています。

工藤 サンクスカードは実施する会社もそこそこ耳にしますが、継続できない場合が多いとも言われています。素晴らしいです!
佐賀 何をするにも会社や上司の方針でやる、ということをしてできるだけ避けています。皆のコンセンサスが8割を超えたらやってみよう。皆が好んでやる気になってもらわないと何事も上手くいかないですね。
工藤 継続するためには主体性も大事。モチベーションにも影響しますね。話は変わりますが、昨今の秋田のビジネス環境で注目していること等はございますか？

佐賀 我が社はほぼ東京のメーカーとのやりとりになりますので、社会奉仕等も含め地域にどう貢献ができるのかということは課題の一つです。私としてはもっと外国の方の受け入れを応援し推進すべきと思っています。外国から人が来ることで県内の消費向上にも繋がり、労働力となっていくことで出荷額のプラスにも繋がります。ひいては秋田における製造業の生産性を高めることにも繋がると考えています。

工藤 建設事業者様からも、以前外国人雇用についてお話いただきました。きつと顕在的なニーズの一つなのでしょう。最後に起業家へのメッセージをお願いします。

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ 工藤 実

ライター J-MOTHER'S 藤田 幸
企画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)

佐賀 自分でやりたいというモチベーションをどのくらい持ち続けられるかということが大切だと思います。何をやるにしても「やり抜く決意」が大切です。「決心・実行・継続心」です。決心、実行まではたどり着くのですが、継続してやり抜くということは中々難しい。色々な局面で折れそうになることも沢山ありますが、継続心ほど強いものはないですよ。

何事も成長するのは楽しい嬉しい。

現在の仕事以外での楽しみは農作業だとおっしゃる佐賀会長。米、じゃがいも、トマト、ナスなど沢山の作物を育てられており、なんとご自分で作られたお米を一部のお取引先へお歳暮として贈られているそうです!作物が育っていく姿は人間が成長していく過程と重なるものがあると感じられ、作業は大変ですが、とても楽しいし嬉しいとおっしゃっていました。



※撮影のために一時的にマスクを外しています。